國民讀本

尋常小學校用

卷七

C24
ｶ

25943

T1A3
10
B89j

明治三十年四月十二日

文部省檢定濟

尋常小學校讀書科生徒用教科書

國民讀本

尋常小學校用

図書 和図書 遡

a1380327981a

福岡教育大学蔵書

卷七目次

第一課　三種ノ神器　一
第二課　國史ノ大要　二
第三課　我が國の美術　三
第四課　日光山　五
第五課　三景　六
第六課　毛利元就　八
第七課　立志　九
第八課　養生　十一
第九課　温泉　十二
第十課　病氣見舞　十四
第十一課　貯蓄　十五
第十二課　蜜蜂ノ話　十七
第十三課　協同の力　十八
第十四課　會社　二十
第十五課　生業　二十一
第十六課　學問　二十三
第十七課　源義家　二十四
第十八課　油斷大敵　二十六
第十九課　凶年ノ備　二十七
第二十課　薩摩氏　二十九

第二十一課　有用ノ植物　三十
第二十二課　石炭　三十二
第二十三課　軍艦の歌　三十三
第二十四課　水兵ノ勇敢　三十五
第二十五課　我ガ國ノ國體　三十六

皇室　傳　給　劍　孫

國民讀本巻七

第一課　三種ノ神器

我ガ　皇室ニハ、皇祖天照大神ヨリ傳ハレル、三種ノ神器アリテ、代々ノ　天皇、之レヲウケサセラレテ、御位ニ即カセ給フナリ。三種ノ神器トハ、ヤタノ鏡、ムラクモノ劍、ヤサカニノマガ玉ニテ、コレ、昔、皇祖天照大神ノ御孫、ニニギノ尊ノ、此ノ國ヲ治メントテ、ノゾマセ給フ時、皇祖ノ、御手ヅカラ

サヅケ給ヒシモノニシテ、殊ニ神鏡ハ、之レヲミルコト、朕ヲミルガ如クセヨト、ノタマハシ、所ナリ。

鏡ノクモリ無キハ、智ノ明カナルニクラブベク、劍ハ、心ノタケキヲシメシ、玉ニハ、メグミノ德ヲソナフ、皇祖ノ、此ノ三種ノ神器ヲサヅケ給ヒシ、深キ大御心、アフギ奉ルモイトカシコシ。

ソレヨリ代々ノ　天皇、コレヲ宮中ニイツキ。マツラセ給ヒ、少時モ、御カタヘヲハナシ給ハザリシガ、後、ケガサンコトヲハバカラセタマヒテ、之レヲ他ニウツシ奉リ、別ニ鏡劍ヲウツシ造リテ、宮中ニオカセラレタリ、今、イセノ神宮ニハ、鏡ヲマツリ、ヲハリノ熱田ニハ、劍ヲマツリ給フ、マガ玉ハ、代々ノ天皇、御カタヘヲハナシ給フコトナシトゾ。

第二課　國史ノ大要　二

神武天皇ヨリ、第十代目ヲ　崇神天皇ト申

シ奉ル、此ノ　天皇、殊ニ政治ニ心ヲトメサセタマヒ、又、道路ヲ開キ、舟ヲ作リテ、往來ノ便ヲモ開カセタマヒキ。

第十四代ノ、　チユウアイ天皇ノ御キサキヲ、神功皇后ト申シ奉ル、三韓ヲウチテ、之レヲシタガヘ給ヒツ。

第十六代　仁德天皇ハ、深ク民ヲアハレマセ給ヒ、宮城ノヤブレタルモ、修メ給ハズ、數々ミツギヲユルシタマヘリ。

第五十代　クワンムテンノウ天皇ノ御代ニハ、都ヲ奈良ヨリ京都ニウツシ給ヒ、又、エゾヲウチテ之レヲ平ゲ、大ニ東北ノ地ヲヒラキ給ヘリ。

此ノコロヨリ、藤原氏、ヤウヤク朝政ヲホシイマヽニシケルガ、第七十一代ノ　後三條

幕府

天皇之レヲオサヘテ、親ラ政ヲトラセ給ヘリ、其ノ後、源ヨリトモ、幕府ヲカマクラニ開クニ及ビテ、天下ノ政、武家ノ手ニオチタリ、北條氏、其ノ後ヲウケテ政ヲトリシガ、其ノ第六代時宗ノ時、元ノ國ヨリセメ來リシヲ、ウチハラヒキ。

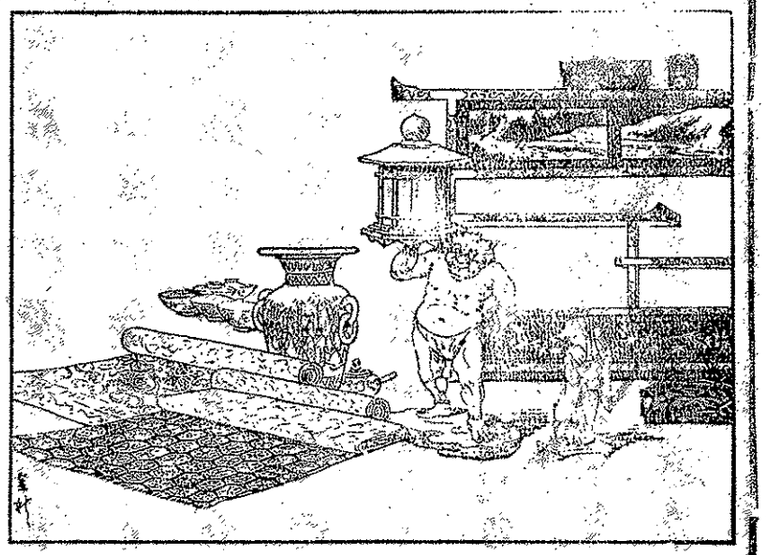
時宗

第三課　我が國の美術

勇

我が國人は、義に勇む、たゞき心の有るのみならず、まこと、やさしくみやびふる心に富めり、ちれば、古き昔より、すべての細工にたくみにして、玉磨みがき、ほりものをなす等のわざも、早く開き居たることゝ、神代より今にいたるまで、種々の器物によりて知るべき。

細工



佛像
佛畫

其の後、佛像、佛畫などの、外國よりわたり來

術

るに及びて、ほりもの、術、畫の法、ともに益開き出、されど、おほむね、外國の風にして、我が國風に合はざるもの多かりしが、名人上手世々に出でゝ、工夫巧こらし、其のさ大に進みて、つひに、全く、我が國風の美術となれり。

塗物
陶器

こゝより、畫、ほりもの、は、云ふに及ばず、塗物、織物、陶器等、皆、みなびふる物を製出し、近來に及びては、我が國の美術は、世界第一と稱

勢らはゝにいたれり。

かくの如く、我が國美術の進みたるは實に山川景色の美ゴーて、自然に、人心を美ふらしめたるにのりと云ふ。

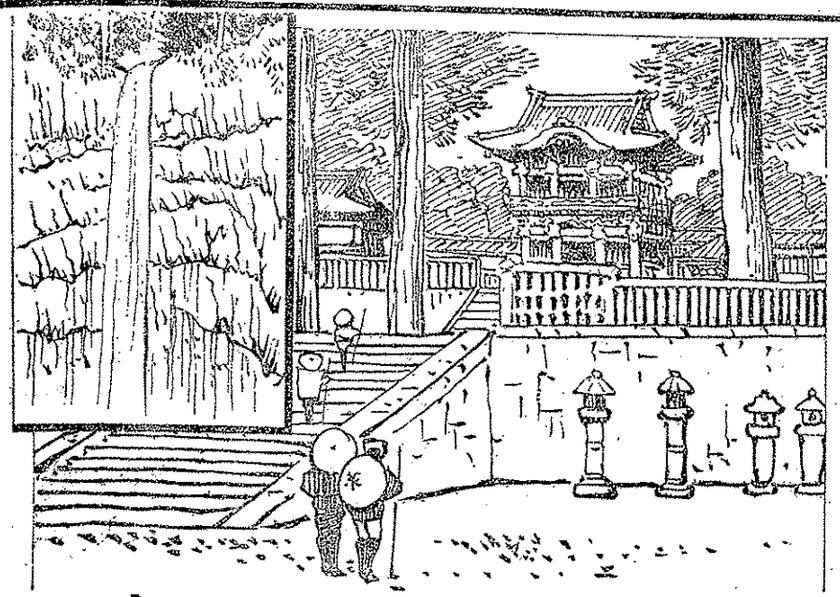
柱

家康社殿

第四課　日光山

日光山は、下野國にあり、山中に東照宮とて、徳川家康をまつる社あり、其の社殿の美しきこと、海内に類なしと稱せらる、殊に陽明門の如きは、柱、らんぬなどに、人物花鳥の

結構



類を、見事にたゞみて、細かにいろどりをほどこしたれば、終日見れども、あくことなし、故に、人とむて日暮らしの門と云ふ、されば、世のことゞもに、『日光を見ざれば、結構を云ふ』と云ふことさへあり。

中禪寺　瀧　流　屈曲

又、山中に中禪寺の湖あり、山々其の四方をとりまき、地えづかにして、景色のよきこと、云はん方なし、其の水れちて瀧となる、まごんの瀧と云ふ、高さ七十餘丈、其のひゞき、あたかも、かみなりの如く、水けぶる谷間にみつ、其の下流を大谷川と云ふ、清き流れの、岩石の間を屈曲して走るさま、得もいはれぬおもむきあり。

日光山中は、のゝ風景に富みたる上に、氣候

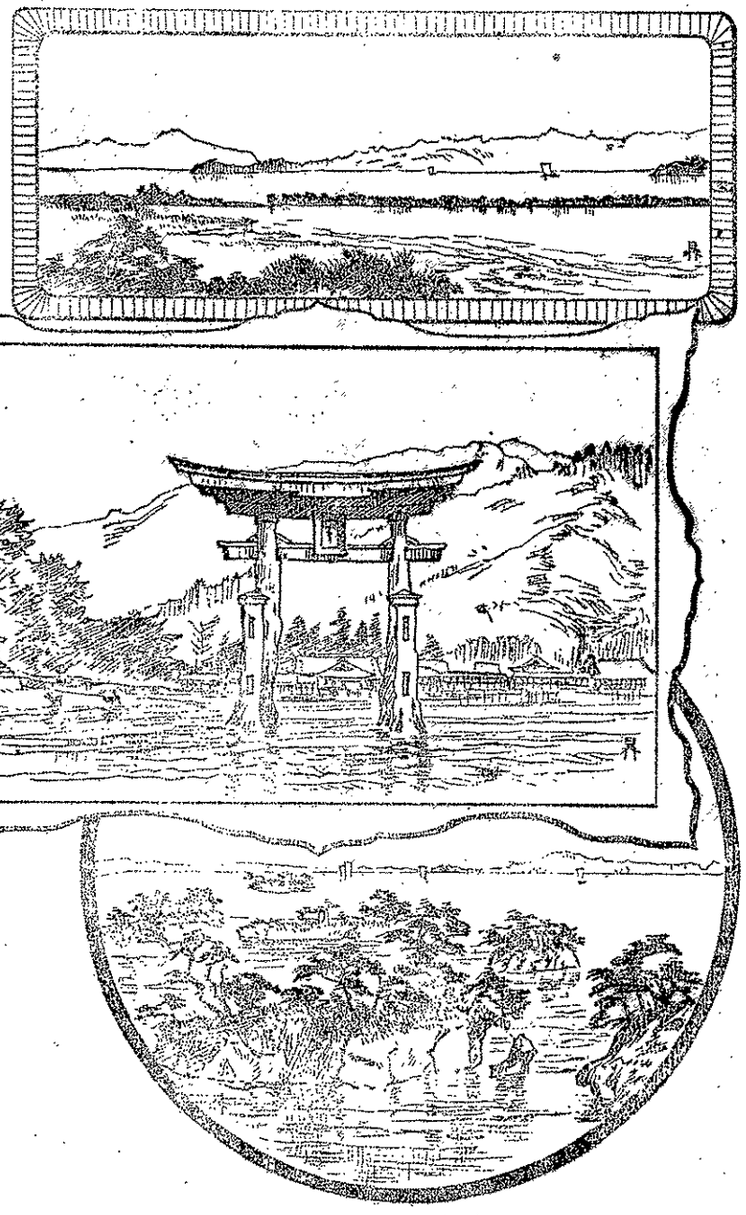
涼しく、夏も暑を知らざるを以て、毎年七八月のお祭にいたれば、暑をきけて、此の地に遊ぶもの甚だ多し。

第五課　三景

我ガ國ニハ、風景ノヨキ所、甚ダ多ク、中ニモ、安藝ノ嚴島、丹後ノ天ノ橋立、陸前ノ松島ハ、日本ノ三景ト稱セラル。

嚴島ハ、全島山多クシテ、老樹森ヲナシ、メヅラシキ形ノ岩石少ナカラズ、其ノ北岸ニ嚴

涼　安藝嚴島　丹後　北岸



龍宮

島神社アリ、平清盛ノ建テタル社ニシテ、社殿甚ダ美シク、其ノ鳥居ハ、海中ニ立チ、船ニテ、其ノ下ヲ通行スベシ、ウシホノミツル時ハ、海水來リテ、社殿ノ下ヲヒタシ、是レゾ龍宮ナランカト、思ハル、バカリナリ。

天ノ橋立ハ、白砂細長ク海中ニツキ出デ、青松之レニ生ヒシゲリ、遠ク之レヲノゾムトキハ、アタカモ、長橋ノ波ニウカベルガ如ク、其ノナガメノヨキコト、云ハン方ナシ。

散在

松島ハ、數百ノ小島波上ニ散在シ、老松之レヲオホヒ、カゲヲヒタシテ、コマヤカナルミドリノ色ハ、其ノ間ヲ往來スル、白帆ノカゲトウツロヒ合ヒテ、風景ノウツクシキコトタトフルニモノナシ。

元就　松壽丸

第六課　毛利元就

毛利元就ハ、安藝ノ人ナリ、ヲサナキ時ノ名ヲ松壽丸ト云フ、カツテ、家來ノモノニオハレテ、川ヲワタリケル、家來ノモノアヤマ

リツマヅキテ、川中ニタフレシカバ、イタクオソレ入リテ、其ノ罪ヲユルサレンコトヲコヒシニ、松壽丸云ヘルヤウ、道ヲ行クモノ、必ラズシモ、ツマヅカズト云ヒガタシ、何ゾ其ノ罪ヲ問ハンヤトテ、少シモ怒レルサマナカリキ。

又、或ル時、家來ノ者ト、嚴島ノ神ニマウデシガ、歸リ來リテ、家來ノ者ニ向ヒ、汝等ハ、御神ニ何事ヲイノリシヤト問ヘリ、家來ノ者、子ガハクハ郎君ヲ以テ、安藝國ノ主トナシ給ヘト、イノレリト云ヒシカバ、松壽丸云フヤウ、人ハ、天下ニ主タランコトヲ子ガヒテ、僅ニ、ヨク一國ニ主タルヲ得ルモノナリ、ハジメヨリ、一國ニ主タランコトヲイノラバ、其ノ得ル所、マコトニ小ナランノミ、何故ニ天

名乘　賢　某　志

下ニ主タランコトヲ、イノラザリシト云ヒシトゾ。

松壽丸、成長シテ元就ト名乘リ、大内ヨシタカノタメニ、其ノ反臣陶晴賢ヲ嚴島ニセメテ、之レヲホロボシ、又、近國ヲアハセテ、ツヒニ、十三國ノ主トナレリ。

第七課　立志

我は、某の事を成さん、我は、如何なる人物とならん、などと思ふを、人の志と云ひ、志をさ

遂　困難

むる故、立志と云ふ、すべて、人は、其れ志の立て樣によりて、或は、ものを大業を成し遂げ、或は、小成に終るものなり、故に、志を立つるは、大ゴトとして、高きをよしとす、上を學ばゞ、中にいたり、中を學ばゞ、下にいたる、下を學ばゞ、何事も成ることなからん。

志、すでに立たば、其の志す所を成さんことをこひねがひ、如何なる困難に出あふとも、少しもたゆむことなふ、然れども、物には、

飛　頂　初

本末あり、事には終始あり、本をすてゝ、末に走り、始をはゝしまゞして、終をよくせんことは、得べきにあらず、故に、志は、如何ほど高大なるも、一と飛びにして、其れのぞむ所に、いたることは能はざるべし、たとへば、高山の頂にのぼらんにも、必らず、ひくきゆゑもとより、千里の道を行かんとするにも、初は、一歩よりぬゝ出だすが如し。

世には、志を立つること、高大なる者なきに

折角

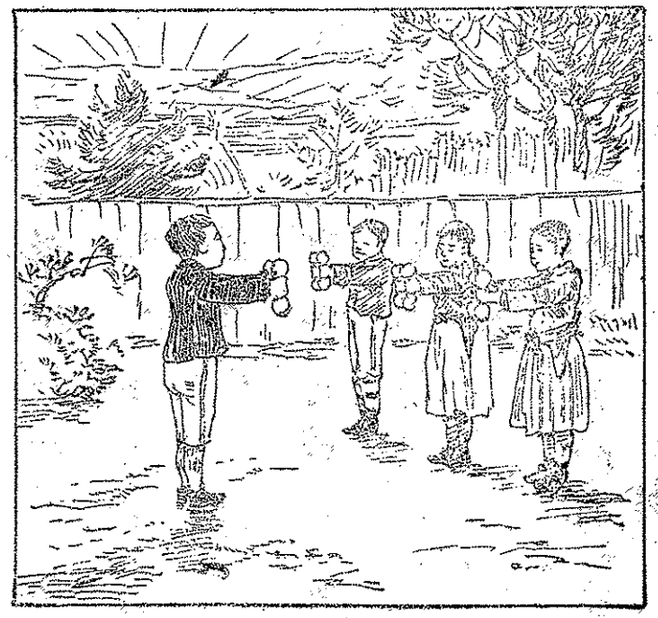
あらず、然れども、其の行ふ所、其の志す所に、かゝはず、たいていは、一と飛びにして、山頂にのぼり、一とまたぎにて、千里にいたらんとするものにして、つまづきたふれざるもの少なし。

かくゝゝ、折角の立志も、空しくなりて、いたづらに、世の笑をまねくにいたらん、心すべきことなり。

第八課　養生

人ハ、身體ノ壯健ナルホド、幸福ナルハナシ、身體壯健ナレバ、樂シク一生ヲ暮スコトヲ得レドモ、若シ、其ノ身ニ病アル時ハ、何事ヲナスニモ、心進マズ、己レノ志ス所ノ業モ、思フマヽニハ、成シ難クシテ、常ニ不幸ノ間ニ、月日ヲ送ラザルヲ得ザルニイタラン。

世ニハ、多病ナル人、多ケレドモ、其ノ生レツキナルハ少ナシ、大方ハ、其ノ身ヲ大切ニセズシテ、養生ノ道ヲ守ラザルヨリ、遂ニ、種々ノ病ヲヒキ起シタルモノナリ。



サレバ、人ハ、幼キ時ヨリ、養生ノ道ヲワキマヘザルベカラズ、養生ノ道トハ、毎日、朝早ク起キ出デヽ、新シキ空氣ヲスヒ、飲食物ヲツヽシミ、常ニホドヨク運動シ、身體ヲ清潔ニスル等ヲイフナリ。

又、多ク心ヲツカヒ、思ヒワクルシムルモ、養生ノ道ニアラザレバ、常ニ心ヲ平カニシテ、ミダリニ怒ルコトナク、マタ、餘リ慾深クシテ、心ヲワヅラハスコト等、アルベカラズ。

カクシテ、身體ノ健康ヲタモチ、成長ノ後ハ、十分、オノレノ業ニタフル人ト、ナラシコトヲ心ガクベシ。

第九課　温泉

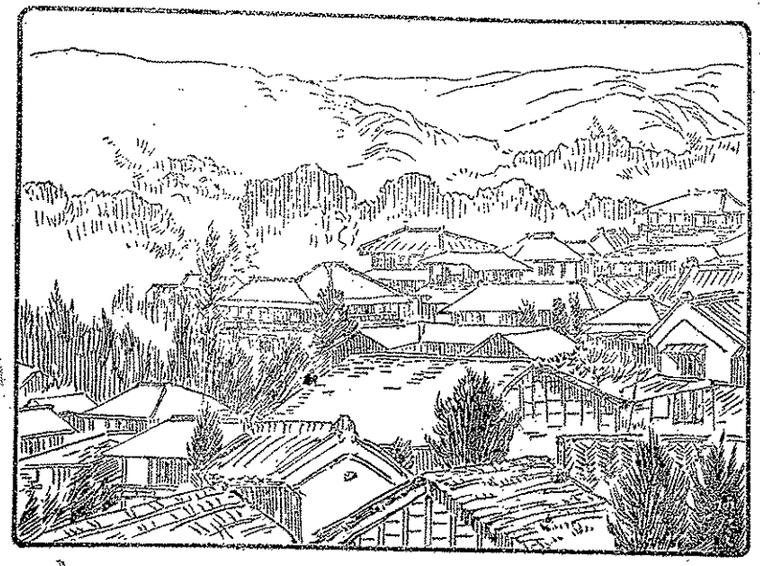
水ノ地中ヨリワキ出ヅルモノヲ、泉トイフ、

泉ハ、多ク冷カナルモノナレドモ、中ニハ、温カキモノアリ、之レヲ温泉ト云フ。

地中ニシミコミタル水ハ、種々ナル岩石ノ間ヲ通リ、其ノ中ニマジレル、種々ノ物質ヲトカシテ、之レヲフクミ來ルモノ多シ、殊ニ温泉ハ、此等ノモノヲフクムコト、多キモノニシテ、病ヲ治スル効能有ルモノナリ。

然レドモ、其ノフクメル物質ノ、異ナルニヨリテ、其ノ効能モ、亦異ナレバ、タトヒ、温泉ニ

浴　隨



浴スレバトテ、病ニヨリテハ、カヘリテ害トナルコトモアルナリ。

温泉ハ、山間ニ出ヅルモノ多ク、又、海岸ニ出ヅルモノアリ、サレバ、温泉場ハ風景ニ富ミ、又、空氣モ清ラカナルヲ以テ、自ラ人ノ心ヲサワヤカニシ、隨テ身體ヲ壯健ナ

勞　相模　伊豆　攝津　醫師

ラシムルモノナレバ、平生、精神ヲ勞スル人等ニハ、大ニ養生トナルモノナリ。

我ガ國ニテ、温泉ノ名高キモノハ、相模ノハコ子、伊豆ノ熱海、攝津ノ有馬、イヨノ道後、上野ノ草津、イカホ、下野ノシホ原等トス。

第十課　病氣見舞

金治と云ふ少年、久しく心地すぐれず、學校をもやすみ居りしが、醫師のすゝめにより、伊豆の熱海に入浴せり、熱海は、空氣清く、

見舞　雑誌　拝啓　快方　専一

風景よきが故に、金治の病氣も、次第に快方に向ひぬ、其の親しき友に、銀造と云ふ少年ありしが、金治の病氣を見舞はんがため、左の如き手紙をしたゝめ、之れにおのれが所持せる、小國民と云へる雑誌を了へ、郵便よりてさし送りぬ。

拝啓　法病氣次第に快方の由賀し奉り候おほ法金枝までゆる〳〵養生専一に存じ奉りは此の雑誌小國民はふ生持

恵贈

合せは品にて法なくさみの為め進上仕候以上

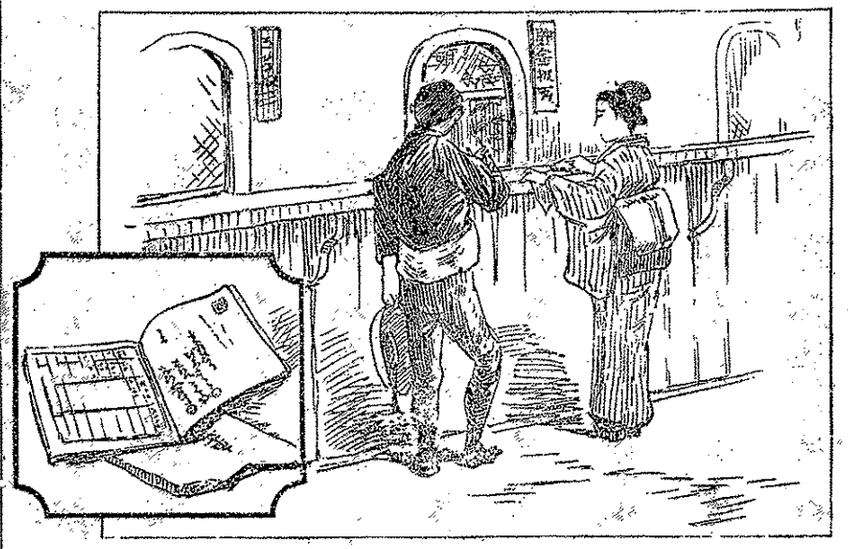
金治は、之れを得て、大によろこび、直に左の禮状を送りぬ。

御手紙拝見仕は私病氣に付て見舞下されれ難有存じ奉りは殊におもしろき雑誌法恵贈にあづかり奉謝ぬ小生病氣は次第に快方に向ひは間法安心下され度先はは禮まで如此に候不一

第十一課　貯蓄

災難　貯蓄　落助

人ハ、病氣其ノ他、思ヒガケナキ災難ニ、アフコトアルモノナレバ、平生勉强シテ、得タル金錢ノ中ヨリ、其ノ幾分ヅヽヲ貯蓄シテ、不時ノ用ニ備ヘザルベカラズ、若シ、少シノ貯蓄モ無クシテ、災難ニアフコトアラバ、タチマチ落チブレテ、人ノ助ケナケレバ、生活スル事能ハザルニ至ルベシ、人ドシテ、助ケヲ得ザレバ、生活スルコト能ハザルハ、此ノ上



モナキ、ハヂト云フベシ。

金錢ヲ貯蓄スルニハ、郵便局或ハ、貯金銀行ニ、アヅケオクヲヨロシトス、此等ノ所ヘ金錢ヲアヅクル時ハ、其ノ局又ハ銀行ヨリ、貯金通帳ヲワタシテ、コレニアヅケ高ヲシルシ、毎年一度、利子ヲ

計算
加

計算シテ、元金ニ加フルナリ、カクテ、アヅケ、主ニ入用アル時ハ、何時ニテモ、其ノ金錢ヲワタスナリ。

諸子、若シ、父母ヨリ金錢ヲアタヘラレシ時ハ、無益ノ物、又ハ、飲食物等ヲ買フコトヲナサズシテ、少シヅヽニテモ、之レヲ貯蓄スベシ、然ル時ハ、子等ノ大人トナルコロニハ、多クノ金高トナリテ、不時ノ用ニ立ツノミナラズ、事ヲハジメ、業ヲ起スノモトデトモナルニ至ルベシ。

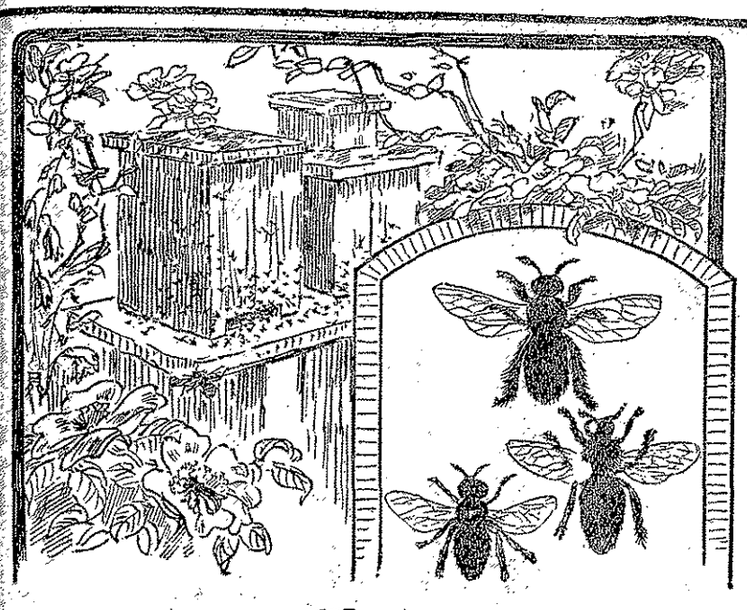
第十二課　蜜蜂の話

蜜蜂
昆蟲
雄蜂

蜜蜂は、山野にすむものもあれども、多くは、人家にかはゝて、蜜ろふを造るを出だす、昆蟲の中、蟲につぎて、有益なるものなり。

蜜蜂の中ヨリ、王蜂、雄蜂、工蜂の三種あり、王蜂は女王と稱して、巣中を治め、又、子を産む此外、何事をもなれこなす、雄蜂もまた、巣中にあるのみにして、其の巣を作り、食をつ

吸花粉



つむる等は、をべて、工蜂の業務おをとん。

工蜂は、其の體、王蜂、雄蜂より小ふれども、強きむねゐりて、たえずをびまはり、花を見、出だん時を頭を其の中に入きて、花の蜜を吸ひ取り、又後足よ花粉をつきて、之をはこび、以て巣中に貯ふこ

軟　感心　働

れ其の食物にして、人の蜜蜂より得る蜜は、實に此の物なり。

工蜂の巣を作るには、體中より、軟にして、ねばきものを出だし、之れに種々の物をまゼへて作るなり、其の巣を開きて、細かに之れが内部を見れば、其の作り方の、たくみにして、能くとゝのひたること、實に感心するにたへたり。

蜜蜂は、かく、能く働き、たくみなる巣を作り

て、其の中にすみ、又、あまき食物をあつめて、之れを貯ふるが故に、冬に至りて、一つの花なき時にも、食物にとぼしきことなきのみならず、其の餘りを供して、人を益することをも得るなり。

第十三課　協同の力

すべて、何事をふにも、數多の人力を合せて、之れをなす時は、一人にて成し得ざることをも、容易に成し遂げ得らるゝものなり。

昔、一人の翁ありて、三人の子を持てる、一日、兄弟のものをよびて、之れに各、底の平かならざる瓢、一個づゝを與へ、己が前におゐて、之れをまつすぐに立てよと命じたり、兄弟は、種々工夫して、之れを立てんとせしかど、

終に、立ることの能はざりき。

其の時、翁は、さらに兄弟に向ひて、三個を一所に立てゝ見よを命じたり。

兄弟は、翁の命ぜしたがひ、其れ言の如くせしに、瓢い、容易に立ちしらば、大に喜びて、立てゝ立てりときゝたり。

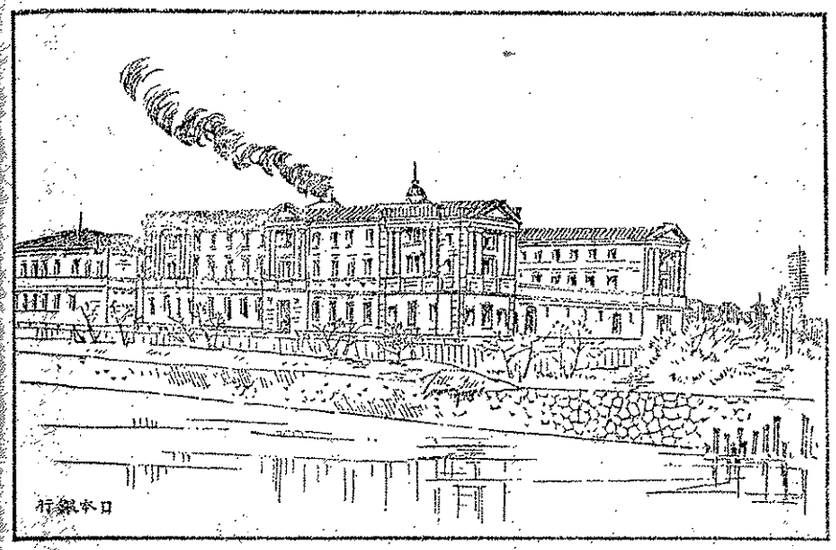
去いたれいて、翁は、兄弟に向ひ、兄弟も此の瓢の如く、ゐごひにそつまゝく、相依りて世に立つこと大切なり、又、他人にても大勢相

依り相助けて、事業ゐす時は、何事にても、成らざることなし、たとへば、一滴の水の相あつまりて、大河とふり、遂に大船をもうかぶるに至るが如しと、をせたりとぎ。

第十四課　會社

商業ヲ營ミ、工業ヲ起ス等、何事ヲナスニモ、資本ヲ要セザルハナシ、而シテ、其ノ事業大ナレバ、隨ヒテ多クノ資本ヲ要スベシ、故ニ、若シ一人ノ力ニテ、其ノ資本ヲ出ダスコト

組合



能ハザル時ハ、多クノ人相アツマリ、各資本ヲ出ダシ合セテ、諸共ニ一事ヲナスナリ、カクノ如クニシテ、事業ヲナス組合ヲ會社ト云フ。

會社ノ仕組ミニハ、種々アリ、又、其ノナス所ノ事業モ一定ナラザレドモ、

保險　貸　融通

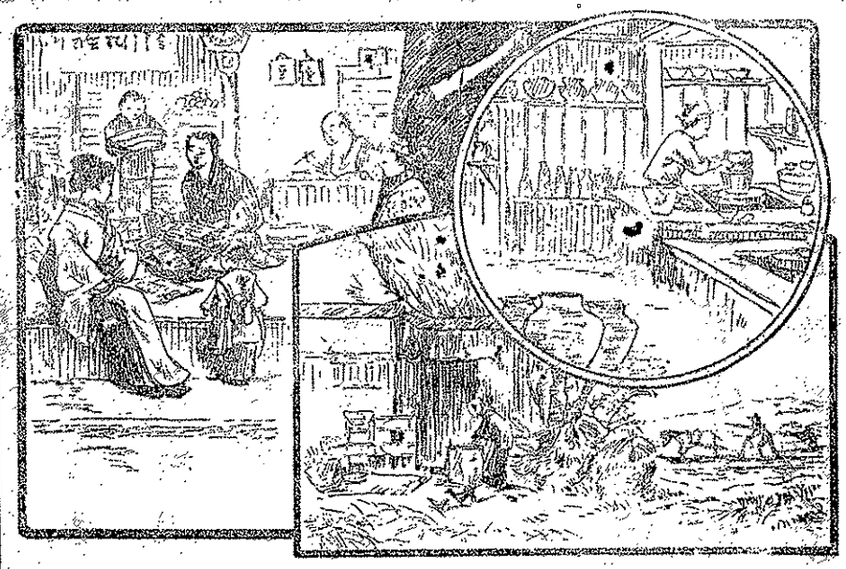
銀行、保險鐵道、通運等ノ諸會社ハ、其ノ主ナルモノナリ。

銀行ハ、主トシテ、金銀ヲアヅカリ、又ハ、貸シ出ダシテ、世ノ人ノ便利ヲハカリ、或ハ、手形ヲ取リアツカヒテ、商業ノ便ヲハカル等、スベテ、金錢融通ノナカダチヲナシ、保險會社ハ災難ヲスクフモノニシテ、何人ニテモ、平生、其ノ會社ニ定メアル、金高ヲヲサメオケバ、萬一災難ニアヒタル時ニハ、會社ヨリヤ

クソクノ保險金ヲ得ラルヽナリ、鐵道、通運等ノ會社ハ、海陸運送ノ便ヲハカルモノニシテ、此等ハ皆、國ヲ利シ、人ヲ益シ、又、自身ノ福利ヲモ進ムベキ、實ニ大切ノ事業ナリ。

第十五課　生業

人ノ生活ニ必用ナル物品ハ、其ノ數キハメテ多シ、若シ、悉ク、我ガ手ヲ以テ、之レヲ造ルベキモノトセバ、其ノ困難、果シテ如何ゾヤ、然ルニ、カヽル困難ナクシテ、唯、我ガ業ヲ務ムルノミニテ、如何ナル物品ニテモ得ラレザルモノナキハ、何ゾヤ、コレ各、種々ノ業ヲ務メテ、互ニ相助クレバナリ。



互耕野菜

各種ノ生業中、田畑ヲ耕シテ、穀物野菜ヲ作リ、又ハ、蠶ヲ養フヲ、農業ト云ヒ、地中ヨリ金銀、銅、鐵及

ビ石炭等ヲホリ出ダスヲ、鑛業ト云ヒ、河海ノ魚類、及ビ海草ノ類ヲトルヲ、漁業ト云ヒ、塗物、陶器、織物ヲハジメ、其ノ他、各種ノ機械器具等ヲ造ルヲ、工業又ハ製造業ト云ヒ、スベテ、他人ノ作リシ物品ヲ賣買スルヲ、商業ト云フ。

其ノ他、山林ヨリ、材木及ビ薪炭ヲトリ出ダシ、又ハ、原野山谷ニ鳥獸ヲ捕フル等、生業ノ種類甚ダ多シ。

機械　薪　捕

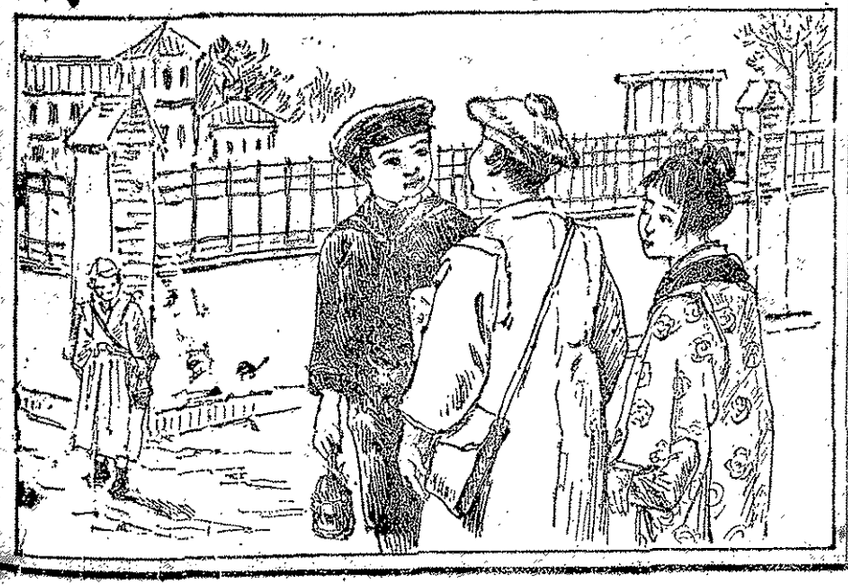
第十六課　學問

人の業には、種々あれば、其の學ぶべきこと、各、同じからず、博く天下の事を知り、深く物の理をきはめ、學者となりて、其の身を立てんとするものは、云ふまでもなし、農となり、商となり、工となるにも、みな、それ〴〵の學問あり。

諸子、成長せる後には、學者とならんと欲するか、農業をつとめんと欲するか、或は商業

を取らんと欲するか、將た工業を起さんと欲するか。

今や、學問の道大に開け、諸種の學校、備はらざるはなし、諸子は、各、其の好む所にしたがひて、學ぶことを得べし。



されども、何の業をなし、

また、何の事を學ぶにも、かならず、先づ人の學ばざるべからざることあり、人の道卽ちこれなり。

人は、もとより、生れつきて善き心を持てるものなり、されども、學ばざれば、正しき道を知ることと能はざるにより、學問せざる人は、知らず〳〵道にたがへる行をなし、身に思はぬはぢを受くることあり。

此の故に、人は、先づ道をまなびて、身を修め、

應用

然る後に、事物の理を學びて、これを己の欲する所の業に應用し、以て事を行ひ、身を立つべし、これ學問の要道なり。

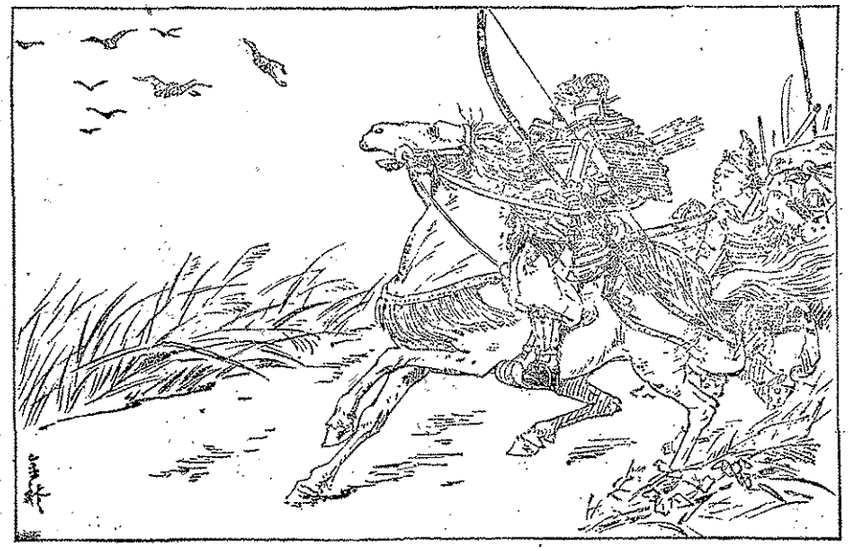
第十七課　源義家

八幡太郎　陸奥頼時

源義家ハ、八幡太郎ト稱シ、武名世ニ高カリシ大將ナリ、陸奥ノ人、安部頼時ト云フモノ反ヲハカリシ時、父頼義ニシタガヒテ、之レヲウチケリ。

然ルニ、頼時其ノ子ト共ニ、能クフセギシカバ、其ノ戰九年ニワタリヌ、世ニ之レヲ前九年ノ役ト云フ。

聞器量



義家、或ル時、京都ニオイテ、陸奥ニオケル合戰ノ有樣ヲカタリシニ、或ル人、之レヲ聞キ、義家ハ、器量スグレシ男子ナレドモ、ヲシキコトニハ、イマ

出羽武衡　雁　伏兵

ダ兵法ヲ知ラズト云ヒシカバ、義家、遂ニ其ノ人ノ弟子トナリテ、兵學ヲ勉強セリ。

義家ハ、其ノ後、出羽ノ國ニ下リテ、清原武衡ト云フモノヲウチシガ、或ル時、雁ノニハカニ、ダレ飛ブヲ見テ、其ノ野ニ伏兵ノアル事ヲサトリ、之レヲサグリ得テ、大ニカツコトヲ得タリ。

此ノ時、義家云ヘルヤウ、兵法ニ云フ、鳥ノミダレ飛ブハ、伏兵ノアルシルシナリト、予、兵法ヲ學バザランニハ、實ニアヤフカリシナリト、此ノ戰三年ニワタリヌ、世ニ之レヲ後三年ノ役トイフ。

此ノ兩度ノ合戰ニ於テ、義家父子ノ武名東國ニトドロキワタレリ。

油斷

第十八課　油斷大敵

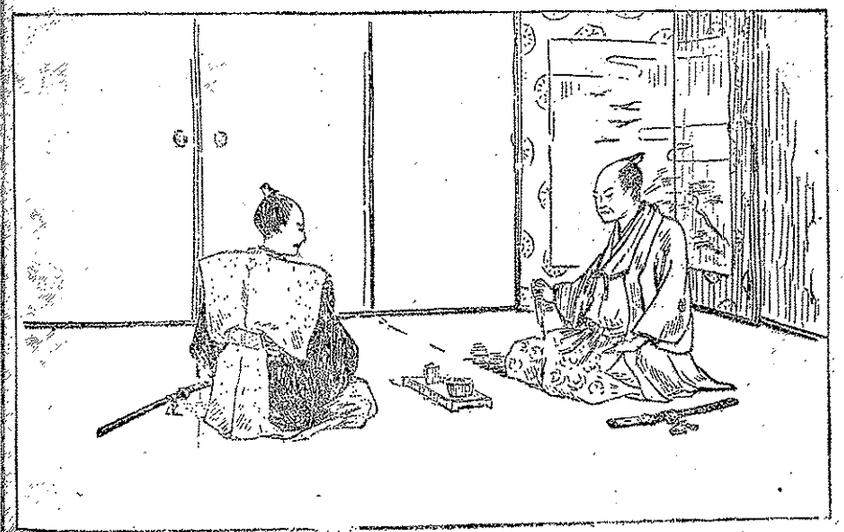
凡ソ、何事ニテモ、心ヲ用フル事、細ヤカニシテ、平生油斷セザル時ハ、必ラズ、成就スルモノナリ、之レニ反シテ、油斷スル時ハ、將ニ成

戒

頃俊才

就セントスル事ニテモ、タチマチ、アトヘカヘルコトアリ、サレバ、古來、心アル人ハ、常ニ油斷スル事ヲ戒メタリ。

井伊直孝ト云ヘル人ハ、徳川三代將軍家光ニ仕ヘテ、忠良ノ聞エ高カリシ人ナルガ、其ノ頃、俊才



永井尚政

尋

大敵

ノホマレアリシ永井尚政、或ル時、直孝ニ向ヒ、『何カ一生ノ心得トナルベキ事モ候ハヾ、ウケタマハリタシ』ト云ヘリ、直孝コレヲ聞キテ云ヒケルヤウ、『ソレコソ、年來心得タル事ノ候ヘバ、今ヨリ三日ノ間、精進シテ後ニ、御出デアルベシ』ト云フ。

尚政ツヽシミテ、其ノ言ノ如ク行ヒテ、三日ノ後、禮服ヲ著シテ、尋子行キシニ、直孝、『油斷大敵ノ四字ヲ守リ給ヘ』ト云ヒケルトゾ、直

孝、尚政ノ如キハ、其ノ頃、有名ノ賢才ナルモ、油斷大敵ノ四字ヲ、カリソメニセザルコト此ノ如シ、我等ハ、深ク思ヒ、能クカンガヘテ、油斷ナキヤウ、平生心ガケザルベカラズ。

第十九課　凶年の備

飢饉　貧賤

ひでり打ちつゞき、或はふが雨ぬりつゞきなどして、作物少しも實らぬことあり、此の如きを、飢饉と云ふ、飢饉年には、諸物のあたひ高くして、貧賤なるものは、衣食を得る

根　乞　死

道なく、木の實草の根にいたるまで、いやしくも、食はほゝ、わどのものは、皆とりて、命をつなぐにいたる、然れども、此等の物も、自由に得ること能はゞして、人の家に立ちて、食を乞ふものあれども、此の如き時には、たれにも餘りなければ、恵みあたふる人もなく、遂に、路のかたはらに、たふれ、死せざるを得ざるにいたる。

昔、天明の飢饉乃時、一人の女、二三歳ばかり

小兒　凶年　設

の小兒をいだき、行く〳〵食を乞ひけれども、誰れも恵む者なければ、小兒は飢にたへずして、なきさけべども、母も飢ゑつかれ、如何ともすること能いで、遂に、心やくるひけん、我が子のうでにかみつきて、其のまゝにたふれ死にたりと云ふ、聞くも哀れなる事ならずや。

かゝる、凶年の用意にとて、各地方に、それぞれ貯蓄の法を設けありれども、これには、かぎりあれば、人々、平生餘れる財を貯へおきて、凶年に備へとゝすべきなり。

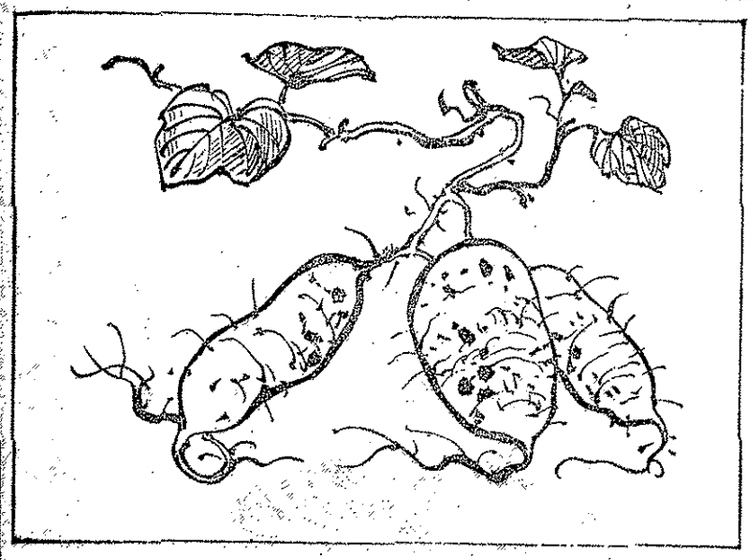
財

第二十課　薩摩氏

予夢　琉球　薩摩　氏　一族　瘠地

予ハ、元來、夢ヲ有スル植物ノ根ニシテ、予ノ祖先ハ、琉球ニサカエ、彼ノ地ノ人ヲ養ヒシガ、子孫ウツリテ薩摩ニ住シ、遂ニ、薩摩ヲ以テ氏トスルニイタレリ。

予ノ一族ハ、他ノ植物ノ如ク、必ラズシモ、コエタル地ヲエラバズ、砂マジリノ瘠地ニア



リテモ、ヨクシゲリサカエテ、子孫ヲフヤス、其ノ體ハ、上下トガリテ、中ホドコエフトリ、常ニ土砂ニマミレ居レバ、形ハ實ニ見ニクケレドモ、ヨク人ニ愛セラル、又カク云ハヾ、自ラホコルニ似タレドモ、凶年ノ備トナリ、飢饉ヲスクフニイタリテハ、他ノモノ、及バザル所ナリ。

サレバ、天文年中ニイタリ、始メテ、青木昆陽ト云ヘル人ニ見出ダサレ、貧民ノ食ニトボシキモノヲスクヘヨトテ、予ガ多クノ子孫ハ、ヒロク諸方ニ分ナヤラレ、マタ凶年ノ備ニ志アル諸大名ハ、アラソヒテ、予ノ一族ヲムカヘシヨリ、今日トナリテハ、日本全國何レノ地ニテモ、予ガ子孫ノアラザル所ナキニイタレリ、予ガ名ハ、イモトモ云ヒ、又甘藷

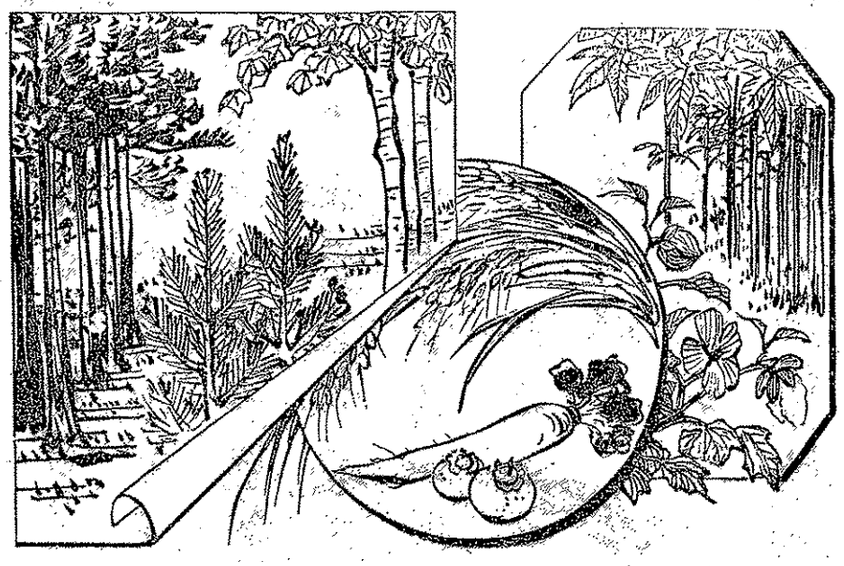
ト、モ稱スルナリ。

第二十一課　有用ノ植物

我等ノ、一日モカクベカラザル、衣食住ヨリ、日用ノ器具ニ及ブマデ、ダイテイ、植物ニテ製スルナリ。

衣服ヲ作ルニ必要ナル植物ハ、綿、麻等ニシテ、又、桑ヲ以テ蠶ヲ養ヒ、藍ヲ以テ絲、織物等ヲソムルナリ。

食料トナル植物ハ、穀物、野菜ヲ始トシ、果物



キノコ類ヨリ、種々ノ海草等ニイタルマデ、皆、人生ニ最モ大切ナルモノナリ。

松、杉、檜、ケヤキ等ハ、其ノミキ高クシテ、十數丈ニイタリ、太サ幾カヽヘモアルモノアリ、此等ハ、キリテ材木トナシ、以テ家

桐　漆　蠟

屋ヲ造リ、器具ヲモ製スルナリ、又器具ヲ作ルニ、最モ重ンゼラル、モノハ、櫻、桐等トス。

ゼン、ワン、或ハ重箱等ヲ、塗ルニ用フル物ヲ漆ト云フ、漆ハ、漆ノ樹ニ切リガタヲツケ、ソレヨリ流レ出ヅルシルヲトリテ、製シタルモノナリ。

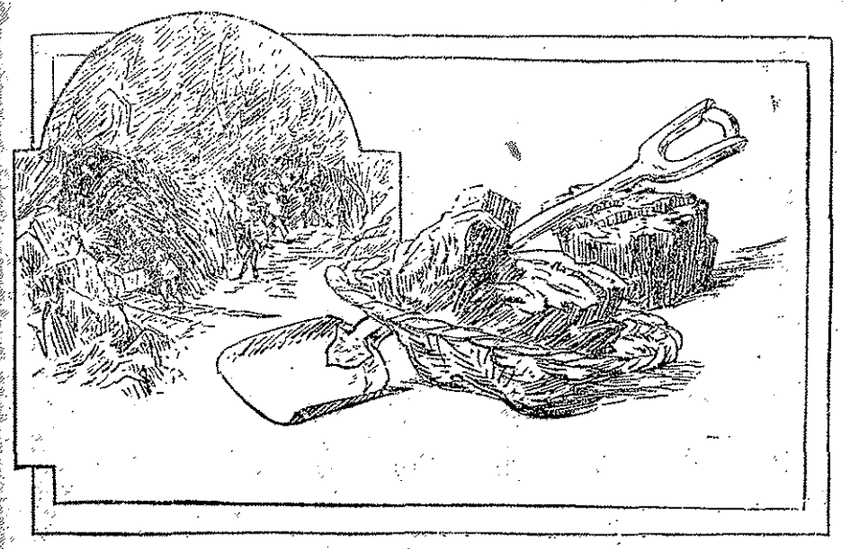
此ノ外ニ、ハゼノ木アリ、其ノ實ヨリ油ヲトリテ、蠟ヲ製シ、又、カウゾアリ、其ノカハニテ紙ヲ製スル等、必要ナル植物、一々數ヘツクシガタシ。

黑色　漸々化坑

第二十二課　石炭

石炭は、黑色のつやある鑛物にして、我が國には、其の産出甚だ多く、中ふも、九州及び北海道等は、其の産出最も多し。

此の鑛物は、遠た古代において、植物の土中にうづもれたるものゝ、漸々化して炭となりたるものにて、之れをほり出だす坑を、石炭坑と云ふ。



石炭をほり出だすは、甚だ困難なる業にて、地中に深き坑をうがち、石炭のある所にいたればたてよこにほりまはし、大なる炭山にては、坑内に鐵道をしき、馬車を用ゐて、石炭を運び出だすなり、かゝる坑内には、人家立ちならびて、坑夫ハ其の内に住み、又、馬小屋などもありて、常に數多の馬をこめおくと云ふ。

無焔炭
褐炭
泥炭

石炭には、無焔炭、黑炭、褐炭、泥炭の四種あり、無焔炭は、火力最も強きゆゑに、鐵などをとかすに用ひ、黑炭は、其の産出最も多く、ひろく、汽船、汽車及び諸種の工業用に供せらる、褐炭、泥炭は、火力やゝとわけれども、また、燃料に供することを得。

燃料

石炭は、其の用きはめてひろく、國の開明へ、之れを用ふる多少によりて、其の進歩の度を知ることを得べしと云へり、されば我が國の石炭に富みたるは、まことによろこばしき事ならずや。

第二十三課　軍艦の歌

第一

陸地遥にへだゝりて、山の雲のも白浪の、空まつぐける水碧き、青海原のたゞ中に、

朝日の影いかゞやけり、なれは御國の日の御旗、我が日の本の守りたる、勇ねに閃えく旗影よ。

第二

見はたすこのぎりはてもなく、水や空ふる青海原、風ふきすさび海なれて、山なす波のたゞ中に、朝日の旗へ閃めけり、あれは御國の軍艦よ、我が大君のひきゐます、威名かゞやく軍艦よ。

第三

我が日の本の軍艦は、構造かしこく器械とく、

これに乘組む人々は、まばらたけををけどへたり、
海は平地ぞ天のきは、地のひみふりと往かでやは、
世界の果の果までも、光りかゞやく日の御旗。

第四

我が軍艦よ乘組める、ますら健男いことぐく、
義を山嶽より重しとし、死を鴻毛と見ふせれば、
勢ひて破れぬ敵もなし、うちてくだらぬふねもなし、
あいれ御國の日の御旗、朝日よ向ふ敵ぞなき。

第五

あいれ御國の日の御旗、むるがへり往く軍艦よ、
君を守りのますらをよ、國を鎮めの軍艦よ、
進め忠義に身をすてゝ、忠義に向ふ敵はなし、
進みて世界の外までも。朝日の御旗をひるがへせ。

第二十四課　水兵ノ勇敢

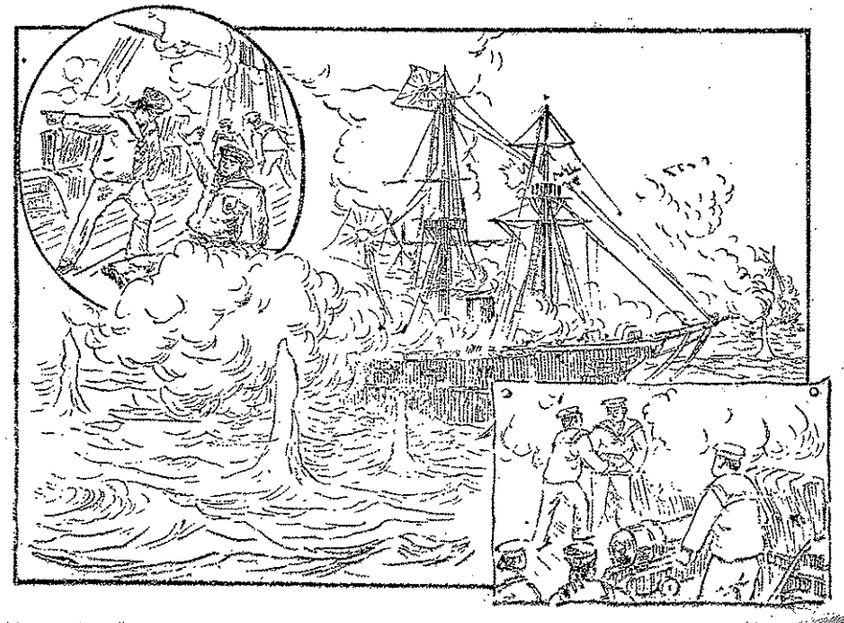
黃海ノ海戰ニ、我ガ艦隊ハ、唯一戰ニ敵ノ艦隊ヲ打チヤブリ、國威ヲ世界ニトヾロカセリ、コレ我ガ將士ノ、國家ノタメニ死ヲ決シテ、戰ヒシニヨルナリ。

比叡　弾丸　奮戰　死傷　息　勝敗

此ノ戰ニ、我ガ軍艦比叡ハ、敵艦ノカコム所トナリ、弾丸アツマリ來リテ、一時ハホトンドアヤフカリシヲ、將士ノ勇戰ニヨリ、漸ク全キヲ得タリシナリ。

サレバ、將士ノ死傷セシ者少ナカラズ、中ニモ、一人ノ水兵ハ、深手ヲオヒテ、息モタエナンバカリナリシガ、タチマチ頭ヲモタゲ、カタハラナル水兵ニ向ヒテ、勝敗如何ヲ問ヒ、敵艦打チシヅメラレヌト聞キテ、大ニ喜ビ、高ク萬歳ヲトナヘテ死ニタリ。

又、一水兵ハ、弾丸ヲイダキテ、マサニ大砲ニコメントセシヲリシモ、敵弾飛ビ來リテ、重傷ヲオヒタリ、サレドモ、尚、タフレズシテ立チ居タリ、ヨリテ、他ノ



勇敢　帝國優

水兵代リテ、其ノ彈丸ヲ受ケ取リシカバ、始テ安心シテ息タエヌ。

此ノ戰ニ、我ガ兵士ノ勇敢ナリシコト、オホム子此ノ如シ、實ニ我ガ國海軍ノホマレト云フベシ。

第二十五課　我ガ國ノ國體

世界ノ中ニアル國ノ數ハ、多シトイヘドモ、我ガ日本帝國ノゴトク、優レテメデタキ國ハナシ。

瑞穗　寶祚　窮　皇統

夫レ、我ガ日本帝國ハ、神代ノ昔ニアタリ、皇祖天照大神ノ、皇孫ニ、ギノ尊ニ、三種ノ神器ヲサヅケ給ヒテ、此ノトヨアシ原ノ瑞穗ノ國ハ、我ガ子孫ノ王タルベキ地ナリ、ナンデ、就キテ治ムベシ、寶祚ノサカエンコト、マサニ、天地ト共ニ、窮マリナカルベシトノタマヒテ、此ノ國ニ君トシノゾマシメ給ヒシヨリ、今ニイタルマデ、スデニ、二千五百餘年ノ久シキヲヘタレドモ、皇統連綿ト

シテ、キハマリナク、イマダ、カツテ、一度モ、外國ノ侮ヲ受ケタルコトナシ、然カモ、國威ヲ海外ニカガヤカシタルコトハ、數ナリキ、コレ御歴代ノ　天皇、仁聖ニオハシマシテ、深ク民ヲアハレミ、能ク此ノ國ヲ治メ給ヒシト、我等ノ祖先ヨリ、忠孝ノ道ヲ重ンジテ、君ニ仕ヘマツリ、以テ、能ク此ノ國ヲ守リシトニ由ルナリ。

カヽルメデタキ國ニ生レタル我等ハ、ソモソモ何等ノ幸福ゾヤ。

サレバ、我等臣民タルモノハ、子々孫々ニイタルマデ、此ノ類ナキ國體ヲ奉ジテ、益忠孝ノ道ヲハゲミ、心ヲアハセ、力ヲ一ニシテ、國ノ光リヲ、世界ノ外マデモカガヤカサンコトヲ、勉メザルベカラズ。

此ノ如キハ、實ニ我等臣民タルモノヽ、片時モ忘ルベカラザル所ノモノニテ、此ノ有リ難キ、國體ヲ、無窮ニ奉ズル所以ナリ。

國民讀本卷七終

版權所有

明治三十年二月廿七日印刷
明治三十年三月二日發行
明治三十年四月六日訂正再版印刷
明治三十年四月九日發行

國民讀本 尋常小學校用 全八冊

定價 卷一、金六錢五厘 卷二、金七錢五厘 卷三、金九錢 卷四、金十錢 卷五、金十一錢 卷六、金十二錢 卷七、金十二錢 卷八、金十二錢

文學社編輯所編纂

東京市日本橋區本町四丁目拾六番地
發行兼印刷者 小林義則

東京市日本橋區本町四丁目拾六番地
發兌 文學社

東京市神田區錦町三丁目五番地
印刷所 文學社工場